

カンキツのルビーロウムシに対するスルホキサフロル水和剤の防除適期は6月中下旬である

2024年及び2025年のカンキツにおけるルビーロウムシ1齢幼虫(歩行幼虫)の発生ピークは6月中下旬である。スルホキサフロル水和剤(商品名:トランスフォームフロアブル IRACコード:4C)による防除効果は、2~3齢幼虫が多い7月中旬の薬剤処理に比べて、1齢幼虫(歩行幼虫)発生ピーク前後の6月中下旬の処理で高い。

農業研究センター果樹研究所病虫化学研究室(担当者:後藤聖士郎)

研究のねらい

本県のカンキツ栽培において、近年ルビーロウムシなどのカイガラムシ類による被害が増加している。カイガラムシ類はふ化後、脱皮に伴って虫体やロウ質物が肥大し、防除効果が低下することが知られている。そのため、最近の気象条件下における幼虫の発生時期と防除適期の解明が求められている。そこで、ルビーロウムシ1齢幼虫(歩行幼虫)の発生時期を解明することに加え、2017年に登録取得した新系統(IRACコード:4C)の殺虫剤「スルホキサフロル水和剤(商品名:トランスフォームフロアブル)」による、ルビーロウムシの防除適期を明らかにする。

研究の成果

1. 2024年および2025年のルビーロウムシ1齢幼虫(歩行幼虫)の発生は、6月中下旬にピークとなり、7月中旬には終息する。7月中旬には、2~3齢幼虫が主体となる(図1、図2)。
2. ルビーロウムシに対するスルホキサフロル水和剤の防除効果は、2~3齢幼虫が多い7月中旬の薬剤処理に比べて、1齢幼虫(歩行幼虫)発生ピーク前後の6月中下旬の処理で高い(図3)。

成果の活用面・留意点

1. 本成果は、カンキツにおけるルビーロウムシ防除に活用できる。
2. 防除の際は、十分な量の薬液を樹全体にムラがないよう散布する。なお、梅雨時期の散布は、耐雨性向上のためマシン油乳剤または展着剤を加用する。
3. カイガラムシ類に対するトランスフォームフロアブルの農薬登録の適用内容は、希釈倍数「1000~2000倍」、使用時期「収穫前日まで」、使用方法「散布」、総使用回数「3回以内」(2025年12月現在)である。なお、使用にあたっては、最新の農薬登録内容を必ず確認し、記載事項を遵守する。
4. 本成果は、九州病害虫防除推進協議会「病害虫防除法改善連絡試験」(R6~R7)において得られた成績の一部である。

【具体的データ】 No. 1169 (令和8年(2026年)5月) 分類コード 04-09 熊本県農林水産部

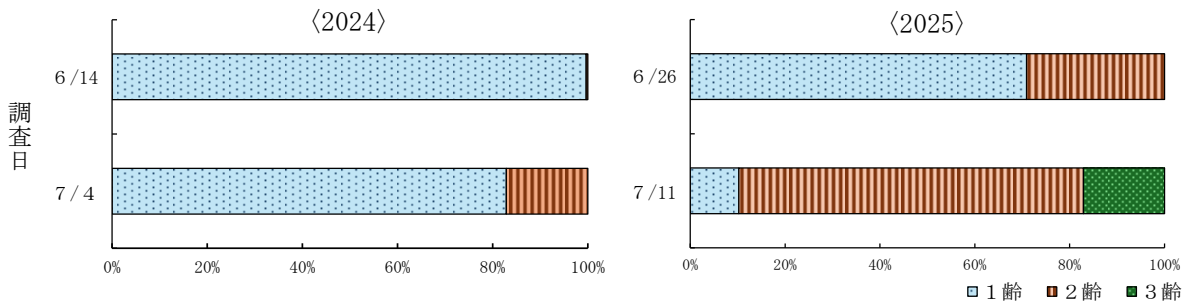


図1 時期別のルビーロウムシ齢別割合 (%)

【調査概要】

調査地点：農業研究センター果樹研究所 品種：「肥のあかり」露地栽培（殺虫剤無散布樹）

調査個体数：〈2024年〉2246頭（6/14）、1495頭（7/4）；〈2025年〉3811頭（6/27）、3471頭（7/11）

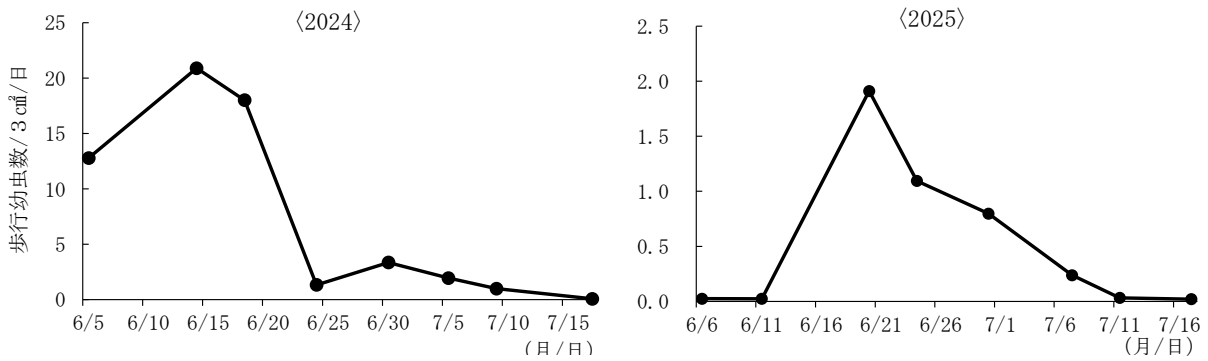


図2 ルビーロウムシ1齢幼虫（歩行幼虫）の発生消長

【調査概要】

両面テープ調査により捕獲された歩行幼虫をテープ3cm当たりの個体数かつ日当たりの個体数に換算。

調査地点：農業研究センター果樹研究所

〈2024年〉「肥のあかり」露地栽培、1樹3枝を調査（殺虫剤無散布樹）。

〈2025年〉「興津早生」露地栽培、3樹3枝を調査（殺虫剤無散布樹）。

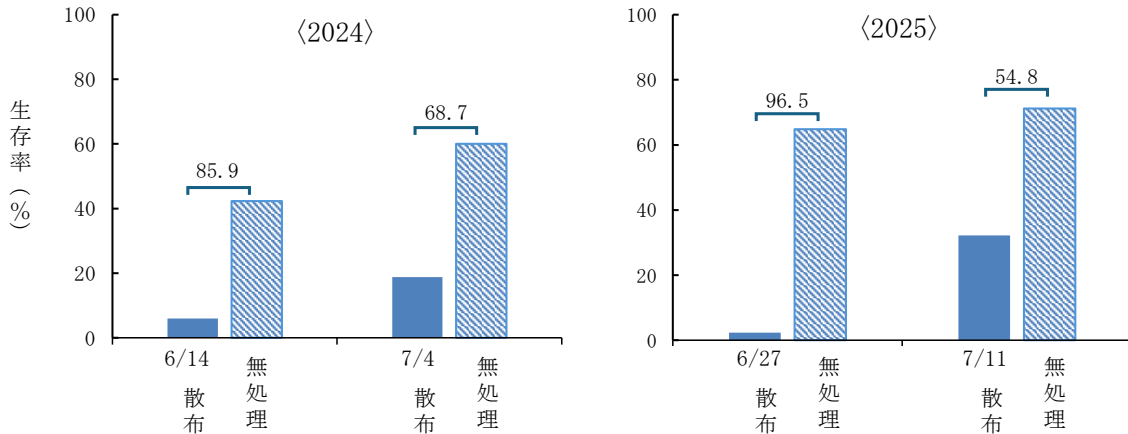


図3 スルホキサフロル水和剤の異なる処理時期におけるルビーロウムシ防除効果

注) グラフ上の数値は防除値を示す。防除値の値が大きいほど防除効果が高い。

防除値 = {100 - (試験区の生存率 / 無処理区の生存率) * 100}

【調査概要】

調査地点：農業研究センター果樹研究所 品種：「肥のあかり」露地栽培 区制：1区1樹（枝5本）3反復

供試薬剤：トランスフォームフロアブル 処理方法：1000倍散布

薬剤処理日：〈2024年〉発生ピーク時：6月14日、発生終期：7月4日

〈2025年〉発生ピーク時：6月27日、発生終期：7月11日

調査方法：調査枝として、当年枝を樹当たり5本選定し、6月上旬に別の樹から採取したルビーロウムシ雌成虫の寄生枝を振り付け、幼虫を放虫。その後、各調査日に枝へ定着したルビーロウムシの個体数を計数し、処理後の生存率および防除値を算出。

調査日：〈2024年〉発生ピーク時処理：6月14日・8月7日、発生終期処理：7月4日・8月7日

〈2025年〉発生ピーク時処理：6月26日・8月14日、発生終期処理：7月11日・8月14日

無処理区における処理前の個体数：〈2024年〉748.7頭/樹、〈2025年〉1270.3頭/樹